

浄土

1979-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別郵便物認可) 第三号
昭和五十四年四月二十五日印刷 昭和五十四年五月一日発行
第四十五卷 第五号



S. Kuz

子を想う母のころ

春、四月の増上寺は、浄土宗の開祖法然上人の御命日をしのぶ法要、「御忌会」で賑わいます。日本各地の寺々から御住職方が、代る代る御導師を務めるために登嶺され、檀信徒の団体参拝の列が長く続きます。可愛らしいおちこさんの行列も出て、朱塗りの山門のあたりには、ひととき、静かなよき時代の日本の昔に帰ったような雰囲気がかたよいます。この増上寺の境内、本堂の右隣り、徳川

家の守り本尊を祀る黒本尊殿の前に、ここ数年來、水子供養のための可愛らしいお地藏さまが建てられるようになりました。せっかく母の胎内に生を受けながら、不運にもこの世に生れ出ずることなく、永遠の世界に還って行った子供たち。生れ出でてから年を経るころとが少くて亡くなった子供たちの霊をなぐさめるために、両親がせめてもの供養にと奉納したもので、花立てには、花の代りに色とりどりの花車が風に舞っています。はじめのう

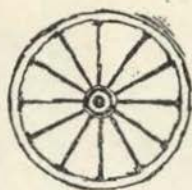
ちはその数も少なく、人目につくこともあまりありませんでしたが、今日では数もたいへんにふえ、こうしておころざしをお持ちの両親の多いことを思い知らされます。水子に限らず、幼ないわが子を失った人々の歎きは、昔から洋の東西を問わず同様で、仏典の中にも、我が子を失った母と、釈尊の物語りが見られます。

王舎城の若き母親は、最愛の子を亡くしてその生命を返せと半狂乱で町中を歩き、救いを求めますが、誰も同情こそしてくれ、相手にはしてくれません。たまたま通りがかった釈尊は、その姿を見て母を呼びとめ、子供の生命をよみがえらせてあげようと約束されます。夢かと喜ぶ母に、釈尊は一つだけ条件があるとし、かつてその一家に不幸のあったころのない家、過去に亡くなった人の一人もない家から、ランブの火を分けてもらってくださるようといわれます。母親は町中の家々を

たずね廻りますが、そのような家庭は一つとしてなく、打ちひしがれて帰って来ます。釈尊は、やさしく、失なわれたものへの悲しみは悲しみとして、とり返すすべもないものに執着することの無益さを説いたので、母親も始めてそのことに気付き、ねんごろに供養して歎き悲しむことを止めた、というものです。

一寸、難かしくなりますが、仏教では「縁欠不生」ということを申します。宇宙、この世のすべては因縁、即ち原因と条件があつてこそ成立し、そのいづれが欠けてもそのものは世にあらわれません。しかし、立派に原因となるものがあり、たまたま、条件が整わないで生ずることなくして終つたものも、だからといって、その原因まで消え去るのではなく、それらは永遠に、「生じない」という状態で存在するものだ、というのであります。我々の不注意で、或は恣意的に、本来生ずべきものが生じない状態にあるということ、を、我々は折に触れて反省してみなければならぬと思います。水子地藏の列を見るたびに、改めてその御両親の心もちが思い起されます。

|| 五 月 号 ||



まず近とは、正助二行を修する者は、阿弥陀仏においてはなはだもって隣近とす。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.28)

目 次

子供の日俳談……………細 田 隆 善……(2)

法 話

生かされて生きる

或る布教師の来た道、往く道 ……………山 脇 秀 侯……(7)

<民話シリーズ> 青い剣と深い沼……………谷 川 のぶ也……(20)

<連載>

六時礼讃の「無常偈」に生きる(2)……………安 居 香 山 ……(12)

善導大師の生涯とその教え(6)

修行と生活態度……………(16)

<読者の声>信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(六)……………吉 村 孝……(32)

法然上人の弟子たち⑨

津戸三郎為守のこと〔五〕……………梶 村 昇……(24)

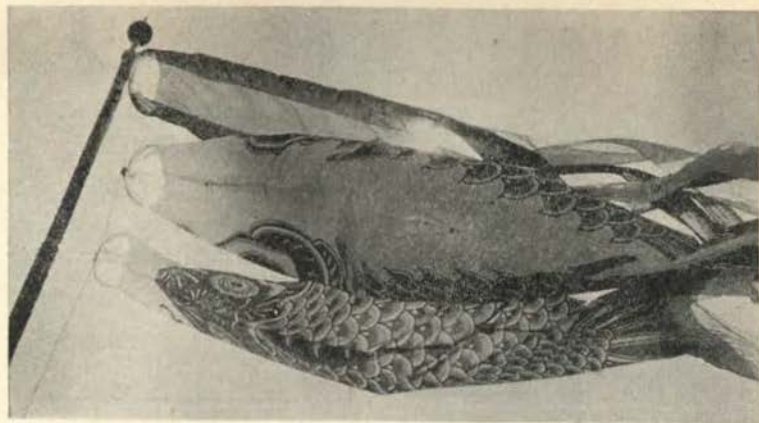
浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(30)

<表紙裏・巻頭言> 子を想う母のころ……………佐 藤 良 純

念仏ひじり三国志⑥ ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



子供の日俳談

ほそだりゅうぜん
細田隆善

(東京三好勢至院住職、俳号豊明)

○ こどもの日

「こどもの日」は、昭和二十三年七月二十日国民の祝日に関する法律によって定められた五月五日の祝日であり、新しい俳句の季節であります。しかしこの祝日制定は、昔から男子を祝う端午の節句を背景として定められました。この日は子供の人格を尊重し、子供の健康と幸福を願い、母親に感謝する日であります。

た
白き風さげて子に添ふこどもの日
か
花圃に花あふれて子等に子供の日

鴻村
敏子

卵割れば小さな満月子供の日

実

バトンガール寺町を行く子供の日

豊明

このように、子供の日を季題とした俳句は、子供に対する愛情をこめた句や明るい句が多いのである。そこで以下、子供の日に因んだ季題と俳句をたずねて見ましよう。

○端午（五月節句、端午の日、菖蒲の日）

（という）

端午の節句は、現在もさかんに行われ、親しまれている行事です。端午は五月の端（はじ）の午（うま）の日という意味からですが、五月五日に定まりました。昔は旧暦ですから、六月上旬の季節にあたります。端午は中国から伝わった行事ですが、江戸時代幕府が五節句を定め、重要な年中行事としたことから広まりました。今日の多くの年中行事は、江戸時代に広まり確立されたものが多いのです。五節句は一月七日の人日、三月三日の雛の節句、五月五日の端午の節句、七月七日の七夕、九月九日の菊の節句で

あります。端午は菖蒲で邪気を払うことから菖蒲の節句ともいいます。

端午は平安時代、朝廷の節会にはじまり、騎射の催しを行い、武勇を尊ぶ武士とゆかりを持つようなり、子供は集って武具を装い弓遊びをしました。また子供は印地（いんぢ）といって石合戦を催し、江戸時代になると印地は端午の子供の行事になりました。また子供は、菖蒲太刀で遊んだり、菖蒲叩きなどしました。この日家の中に武具を飾りたてるようになりました。とくに男の子が生まれた年の節句は、初節句として祝うことがさかんになりました。

雨がちに端午ちかづく父子かな
妻となる娘が光り来る端午かな
四辻（よつじ）や匂ひ吹きみつあやめの日
子の婚やホテルへ急ぐ端午の日

波郷 祐久 関更 豊明

○幟（五月幟、菖蒲幟、鐘爐、紙幟、絵幟）

（という）

江戸時代初期から五月節句には、家の前に柵をたて甲冑、薙刀、毛槍、幟、吹流しを飾りました。幟は紙や布で作られ、はじめのころは石畳や立ち波あるいは家紋を描いたものですが、のちに武者絵を描くようになり、幟は俳句の季題となりました。その絵には和藤内、悪源太、金時、牛若丸、弁慶、神功皇后、鐘馗などの強い武将の絵が多い。

江戸住みや二階の窓の初め

一茶

幟暮れて五月の月の静かなり

子規

荷船にもなびく幟や小網河岸

荷風

蛇行する笛吹川や幟竿

豊明

○ 鯉幟

五月節句の屋外に、色鮮やかな鯉幟や吹流がそよ風にゆらぎ、矢車がカラカラと鳴っている風景はまことに情緒のあるものです。鯉幟は江戸の中期から、屋外に飾るようになり、鯉は男性的にして瑞祥として喜ばれ、吹流しにならって、風を口から飲み入れて大空をはね回すよ

うに考案され、これが人気をえてさかんに飾られるようになりしました。明治時代までは紙製が多かったのですが、しだいに布製になり、またはじめは手書きでしたが本染が多くなりました。このごろは団地生活も多くなり、団地のベランダにミニサイズの鯉幟が飾られているのも愛らしいものです。

真上なる鯉幟まづ誘ひけり

汀女

町変り人も変りし鯉のぼり

羽公

鯉幟北洋船団船出待つ

矢風

鯉幟小ささが泳ぐ団地窓

豊明

○ 吹流 (吹貫ともいう)

吹流しは幟竿に大小の鯉幟をとりつけ、その上に飾る。もとは戦場にのぞむときの馬印としたものですが、端午に飾るようになり、俳句の季題になりました。輪に五色の布をつけたもので、青空の下、風に吹かれひるがえる情景はまことに美しく、詩情にあふれるものです。

高空に青き山あり吹流し
江山や吹貫一ついと高し
風のまゝ五色靡けり吹流し

遷子
花襲
豊明

○ 矢車

轆竿の先に花籠、扇子またはブリキなどの回転球をとりつけ、その下に矢車二輪を飾りつけ、俳句の季題です。五月の空に矢車の回っているのもまた楽しい節句風景です。

矢車や男勝りの女の世
矢車がキラリと光る未知の町
矢車の回り烈しき月日かな
大藁家矢車の音鳴り止まず

羽公
波津女
欣一
豊明

○ 武者人形

(五月人形、兜人形、菖蒲人形ともいう)

江戸時代初期から五月節句には、家の前に武具を飾るようになりましたが、江戸の中期から家の中に飾るようになりました。また甲冑を中心として武者人形を飾ることがさかんになり、男の子の健康、幸福、出世を願うようになり、現在にいたっています。この武者人形には、轆絵と同じように、神功皇后、金時、鐘馗、桃太郎、牛若丸、弁慶、清正、太閤などの勇ましい人形が飾られています。

出陣の稚き眉目武者人形
飾りたる兜の緒こそ太かりき
乱好む太刀にあらずと飾りけり
武者人形飾る平和な国日本

多佳子
夜半
青畝
豊明

○ 菖蒲湯

五月節句に、菖蒲湯をたて、邪気を払い子供の健康を願う風習は、鎌倉時代から行われてきました。これは中国で蘭の葉を湯に入れる蘭湯に由来します。菖蒲は尚武に通じ邪気を払うとされ、五月四日の夕方、菖蒲と蓬の

束を軒に吊しました。これを菖蒲葺くといひ、俳句の季題です。またこの風習は平安時代から行われ、菖蒲を髪に挿すことも行われ、これを菖蒲の鬘といひました。菖蒲湯に入り、子供の頭に菖蒲を巻く菖蒲の鉢巻はこのことから由来しました。

湯上りの尻にべったりしやうふかな

一茶

菖蒲浮く昔ながらの楽屋風呂

团右衛門

菖蒲湯の湯顎うて妻入りきて

波郷

みちのくの旅に出逢ひぬ菖蒲の湯

豊明

○ 柏餅・粽 (かしわもち、ちまき、笹粽、飾粽ともいう)

五月節句に柏餅や粽を、五月人形に供え、いただくとは今も盛んに行われています。これは中国に由来しますが、わが国においても古くから伝わり、『伊勢物語』に粽の言葉がでています。とくに江戸時代から、五月節句に柏餅や粽を供えることがさかになり、屋敷に一本の柏を植えたものであります。

猫の子のほどく手つきや笹粽
柏餅古葉をいづる白さかな
てのひらにのせてくださる柏餅
客食へば主人また食ふ柏餅
竝べ売る言問団子と柏餅

一茶
水芭
夜半
虚吼
豊明

○ 薬玉 (くすだま、ちやうめい、きつきだま、五月玉ともいう)

平安時代、五月節句に群臣が薬玉を賜ったことに由来し、『源氏物語』にもでてきます。香を網の玉に入れ、菖蒲などの造花を貼りつけ、五色の糸を垂したもので、邪気を払うとされてきましたが、今は五月節句に飾ることとは少くなりました。

薬玉や五色の糸の香に匂ふ
薬玉の裾せゆく色や風は秋
薬玉や女の子沢山華やける

嘯山
瓦全
豊明

生かされて生きる

—或る布教師の来た道、往く道—



やま わき しゅう こう
山 脇 秀 侯

(滋賀県湖東町来迎寺住職)

私が此の原稿の依頼を知ったのは、和歌山県海南市次ヶ谷正法寺の五重勸誡を終って、佐賀県佐賀市高尾竈王院の年番御忌大法要の布教に随喜する為に、海南より天王寺に出て、着替をする為に待っていた家内と逢った時であった。天王寺より新大阪に出て夕食をなし、夜八時二十七分発のあかつき三号寝台車の中で、改めて讃仰会からの依頼書を読んで之は大変だなあと考えた。佐賀を四月三日に終って四日から滋賀県水口真徳寺の五重相伝の勸誡、雄琴福領寺の御忌、京都富森阿弥陀寺の五重作礼、十二日から大阪府の五重、十四日の締切り迄に原稿が出来るか不安であったが、折角の御申込み、何とかしようと承諾の通知を出した。

○私の出家の動機

私は一九二〇年即ち大正九年三月二十四日、福岡県三井郡草野町四三八番ノ一にて、父を福屋亀吉、母カメの間に長男として出生した。父は私が六歳の時、大正十四年六月十七日、朝食を喰べつつ急死した。今で言う酒の呑

み過ぎから来た胃潰瘍と思っている。母は二十八歳の若い身で後家になり、長女九歳、長男の私が六歳、四歳の弟、妹が二歳、母の腹の中にもう一人、母は四人の小供と腹の子供を連れて母の実家に帰って行った。母の両親は可愛い娘の姿を見て同情したが長く実家に止る事は其の環境が許さなかった。収入のない親子六人の生活は結局口べらしより他に仕方がなく、姉は六年生を修了すると女中、私は五年生の新学期より三里程離れた草野町専念寺に小僧にして頂く為に母は信玄袋に少しの荷物を入れて頼みに行った。師匠は江上秀静上人であった。小僧は私を含めて九人程あった様に思っている。父が亡くなった時母の腹にいた末っ子は生れて直ぐに子供のない人の家に貰われて行った。村のはずれで何も知らない弟を母と二人で見送った思い出は、六十の声を聞いた今でも胸が疼く。父のない家庭は兄弟バラバラに別れた生活であったが、可愛い子供を父亡き為に別れて生活をしなければならぬ母の気持を思う時、『父母恩重経』の遠行憶会の恩が解る様な気がする。兄弟と別れ、母と別れて生活する事はつらかったが、父亡き後の生活の苦しさが母一人のかほそき腕にたよっている事を思う時、私だけの気持は許されなかった。小学校六年修了し県立中学校に入学したがイロイロな理由で二カ月で退学。高等小学校に入学し、卒業後九州本山善導寺普通宗学院に三年間通った。卒業後久留米明善中学の夜間部に入学し三年の時、兵隊検査に甲種合格し、四年生の四月一日西部五十三部隊に入営。大東亜戦争勃発。昭和十七年二月九州門司港よりビルマに進撃した。

○出征より復員

ビルマ従軍はつらかった。私達の部隊は九州編製の竜部隊と言って前線ばかり。遠く雲南省に進駐し、連日討伐のあけくれ、南方仏教の実際の生活を見、又戦争のあけくれの間に遠くヒマラヤを望む印緬国境に行き、白く輝く雪のヒマラヤ連峯をながめて釈尊の国にあこがれ、ビルマ寺院バコダの中で仏に平和を祈るボンジーの姿に

思わず、戦を忘れて合掌した事もあった。併し其の感激も戦争の巷の中に消えて行った。十重禁戒の始めに不殺生戒が設けてあるが、戦争の最中には、殺す事は自分が生き残る事であって美しい倫理道徳は何にもならなかったし、生きたいと言う自己本能の為に多くの人を殺さなければならなかった。かくして、雲南省のあちこちで部隊は玉砕、私の分隊は師団通信隊の無線第五分隊で、昭和十九年九月雲南省騰越にて全員戦死した。そして、その最後の無線を受けたが、井手分隊長以下全員が万歳を叫びつつ散って行ったのである。今、眼前にかつての光景が浮かんで来て、ペンを走らす手がふるえる。

私は馬糧受領の車から墜落し後方の野戦病院にさがっていたので、分隊と行動を共に出来なかったが、分隊が玉砕する時は前線の戦闘司令部に復帰していたので最後の模様を知る事が出来た。こうして戦闘は終わった。昭和二十一年六月、ラングーンから広島の宇品に復帰した。

○求道の旅

昭和二十一年六月に復員し、二十二年四月京都仏教専門学校に入学。昭和二十三年今は亡き仏教専門学校の先生であった千賀真順師の御世話にて、滋賀県愛知郡湖東町大字小八木来進寺の養子に迎えられ、旧姓福屋をかえて山脇になった。

仏教専門学校卒業後、大正大学浄土学三年に編入し、四年卒業後始めて設立された大学院修土課程に学んだ。

昭和二十九年三月十五日修土課程を修了し滋賀に帰って来た。大正大学在学中の学費は、日本育英会の奨学資金で、足りない分は棚経の御布施や、御忌布教、彼岸布教の御礼でまかなった。三十五歳で東京から帰って来た私にとっては、檀家二十四軒の寺の生活はまことに苦しかったが、布教に生命をかける私は古い自転車にのって滋賀の町から村へ、村から町へと布教伝導に東奔西走の雲水生活であった。その活動のさまは、婦人会や小学校の

童話、老人会、PTAの総会の講演会、多い時は一日に三ヶ所四ヶ所、そして夜は十里の道も星を見上げながら帰って来た。

始めは六〇日、一二〇日、二〇〇日と段々布教日数も増えて只今では三〇〇日を越す様になった。現在五重勸誡、授戒の説教と東奔西走の雲水生活を送らして頂いているが、此処に来る迄の道のりはえなかった。人から万才布教師とか、内容がないとか、信がないとか、いろいろ批判を受けたが布教の現場で、信者が泣きながら手を握り、握った後は合掌して喜こんで下さった人の姿を見る時、総ての悲しみや、苦悩は吹きとんで、布教師として生きて来た自分の足跡を振り返って感謝している。自慢高慢は禁物であるが布教の終った後、同行が合掌し、念仏を称えて呉れる姿を見る時、いろんな批判に堪えて来た過去の生活がなつかしく思われて来る。人生は短し、されど布教の内容によって救われ、念仏称名する人の増えて行く現実を見る時、無量寿、無量光の中に生かされて生きる永遠の生命を見出す事にやぶさかではない。今日も行く、明日も行くであろう、私の布教生活は今日一日に全生命を投げうって今日の一日に死んで行く。

喜こんで死んで行く事は、明日又永遠の生命の中に生かされる事であると思っている。ほんとに死ぬる人間がほんとに生きる人間である。やがて桜の花が満開になる。満開に咲きほこった花はやがて悠々と散って行く。散って行くから又来春花が咲く。中途半ばな咲き方では花の値打ちがない。人に見られようと見られまいと自分の持っている全生命を投げ打って咲きほこり、其の後に又人に見られようと見られまいと一塵の春の嵐に惜し気もなく悠々と散って行く姿を見る時、人の一生もその様にありたいと思っ願っている。説教をやり乍ら人に賞めて貰うとも思はないし、又御上手を言っ貰うとも思わない。併し布教の行く先きさきで、話をきいた人が感謝し合掌し、念仏称名声高らかに申して頂く事を何寄りの喜びとしている。

先般大阪岸和田市相川町安福寺の五重に随喜した折、若い二十代の同行が最後に泣いて手を握り、「先生又御

元気で来て下さい」と再会を願う涙声に私も泣いた。今の世の中に二十代の青年が涙を流して感激する様な場面があるだろうか。私と手をしっかりと握って別れた青年は、屹度念仏を称えて呉れると信じている。布教師は念仏を申して頂く為に話を聞いて頂くものである。念仏の残らない布教は生命がない。笑って泣いて其の後、しっかりと手を合わせ、心晴ればれと念仏申す人の一人でも多くなっていくな事を念願して私は今日も布教の現場に生命をなげうって努力して行きたい。「何処迄続くかぬかるみぞ」と昔の軍歌があったが、まさしく何処迄続くか布教の道、併し自分の健康がつづくかぎり、臨命終時の最後迄、私は請われるままにとんで行きたい。そして大きな事を言う訳ではないが、日本中に行く処、念仏の声が高らかにとなえられて行くのを何寄りの喜びびとしてゐる。このように私は、九州の貧乏人の子として生れて逆境に育った男一匹、人生の無常の中を堪えしのんで生きて来た男、とでもいえようか。

その男は大きな御蔭様の中に生かされている。ビルマで散った十八万の英霊、大東亜戦争で散った幾百万の英霊、其の犠牲の御蔭様の上に今日の喜びがある。私は御蔭様の道を自分の体験を通じ説きつづけ悠々往生浄土の白道を進んで行きたいと思っている。そして山脇秀侯が静かに生命を御仏様に任せて、浄土往生した後に、生存者の言葉の中に、過去に山脇秀侯と言う変った布教師がいたらしいと言う一声を聞いて私の魂は満足する事と思っている。

つたない体験を書いて御容赦下さい。只今滋賀県内で五重の勸誡中です。一日四席六日間の布教です。又紙上で御目にかかりたいと思っています。

■ 六時礼讃の「無常偈」に生きる ■

— 日没無常偈(上) —

— 二 —

やす
安 居 香 山 さん
(大正大学教授・文庫)

○

いったい、「無常」とは、いかなることをいうのでしようか。われわれは、日常よく、「ああ無常」ということを言います。特に人が亡くなったときなど、この言葉は痛切なものとして、われわれの胸を打ちます。それには哀調冥々の響きがあります。そんな題の小説もありました。

しかし、「常」とは、恒常不変ということを意味し、永久に変化せず存在し続けることをいいます。従って、「無常」とは、「常で無い」状態、即ち変化して止まな

いことをいうもので、そのこと自体は、何ら悲哀を伴うものではありません。生ずるものは滅し、形あるものは毀れるという自然の真理が、「無常」という語によってあらわされているに外なりません。

ただこれが、「生者必滅」という人間の現実に照して考えられるとき、そこに人情がからみ、愛するものへの離別感、自己自身の死というものへの恐ろしさや、悲しみが、無常に対する悲哀感として、われわれを襲ってくるにすぎません。

しかし、私自身、いかにも割り切ったように、坦々と書いていますが、実のところ、そうとは理窟で分ってい

ても、いかんともできぬ焦燥を、この現実を感じている迷える羊であります。それ故にこそ、釈尊は、こうした現実に対する迷いを、早く解脱するように教えられたのでありますが、頭では分っている、心では解け切れぬところに、凡夫の悲しさがあるのであります。それだけに、われわれは、いつもこの現実をまのあたり見、私自身の問題としてこれに取り組み、何んとかこの現実を乗り越えるように、努力せねばならぬのであります。

本題にもどりまして、善導大師は、この『往生礼讃』において、六時のそれぞれに、「無常偈」をかかげられて、日に六度も、この事実を懺悔反省する機会を与えられているのであります。分り切っていることを、何度も何度も繰り返して、その機会を与えられているところに、大師のこの問題に対する真剣さがうかがわれると共に、それこそが、人間にとって最大の課題であることを、ここで示されているものと、拝察する次第です。六時の順序を追いつながら、大師の真意を汲みとり、わが身に省みてみたいと思います。

六時礼讃の順序からいたしますと、最初は「日没無常偈」ということになります。先づ、その文を掲げてみることにしましょう。

人間忽忽營衆務 人間忽忽として衆務を営んで
不覺年命日夜去 年命の日夜に去ることを覺らず
如灯風中滅難期 灯の風中に滅なんこと期し難きがごとし

忙忙六道無定趣 忙忙たる六道定趣なし
未得解脱出苦海 いまだ解脱して苦海をいずること

をえず

云何安然不驚懼 いかんぞ安然として驚懼せざる

各聞強健有力時 各々聞け強健有力の時

自策自勵求常住 自策自勵して常住を求めよ

一読して頂けば、大体の意味はお分りになると思うのですが、もう少し易しく理解して頂くために、詩人の大木惇夫氏による和訳をかかげてみることにいたします。

人は営み しげくして

日ごと夜ごとに そのいのち

滅び去るをも 覺り得ず、

風にゆらるる 灯しびの

消えなんとする 如くなり、
住み難くして 六道を

行くえもわかず さまよえり、

未だ解脱し得ざる身は

あわれ 苦海を出でがたし、

いかで 驚き懼れざる。

おのおの聞けよ 汝らは

健く力のある時に

自ら策し 勵まして

永遠の住家を 求めよや。

この「無常偈」を拝するとき、まことに全くその通り

と、思わざるをえません。とくに、前六句のごときは、

私達の生活を、ずばりと言いついて、まことに妙という

外ありません。しかし、その内容の余りのよさに、うっ

とりしていられるほど、現実はそのなになま易しいもの

では、ありません。まさに風中の灯が、いつ消えるか分

らないというのが、今日この頃の生活です。

若い内は、生命の生滅のことなど、考える機会が少な

いものです。私なども軍隊に入ったとき、自分の命は、

国に捧げたものだ、頭では考え、又、自分にも言い聞

かせてはいましたが、弾丸の雨降る中を通った経験もな
い私には、極めて観念的な死の覚悟でありました。

しかし、もう六十にも近いこの頃にもなると、親しい
友人が倒れ、同じ年齢の人びとの死が報ぜられること
に、自分も何時いかなるときに、この生命の灯が消える
かも知れぬと、心ひそかに感ずる機会が多くなりまし
た。そして、ちょっとしたでも身体のだこかが調子が悪くな
ると、これはもしやと、つい生命の危険に繋がるものと
して考えてしまうようになってきました。「無常偈」の
なかに、

「どうしてばかんとしていて、この事実をおそれない
のか」

と戒められておりますが、この頃、これをおそれる自省
の念が起ってきているあたり、少しは分ってきているの
かも知れません。しかし、いざ元氣に一日に立ち向う
と、多忙な生活に追われて、いつしか、竿頭に立ってい
る自分の姿を忘れてしまい勝ちです。まさに、「忙忙六
道無常趣」と指摘されている通りです。

ここで、「六道」といわれているのは、仏教の教える
ところで、人間は、この六道の間を右往左往していると

いわれています。

地獄 餓鬼 畜生 修羅^{しゆら} 人間 天上

これらは、それぞれ内容の違いはありますが、多かれ少なかれ、われわれが日常過している姿そのものです。通勤地獄の中で、われ一人よかれしと競う世界、うまいものを人一倍食いたいという餓鬼の心、畜生と変りない生活、いつも腹を立て怒りちらしている修羅世界、少し人間らしい、更には上等らしい生活の中でも、心はこの六道のわくの中で、毎日吾を忘れて、走り廻っているのが、いつわりのない現実です。

かつて私も戦中、戦後にかけて、苦難の生活を人並みにしました。然し、腹がへった時など、いかに人間は自我を失って、人を蹴散らすかを軍隊生活の中で味わった時ほど、自分のみじめさを知ったことがあります。生々競走には、勝たねばならぬかも知れませんが、せめて共に生きる最小限の分ちあいができることを、仏の教えとして反省してみた次第です。

善導大師は、この人間のみじめな姿を、心にくだり、美しい詩句で表現されておりますが、全く考えてみれば考えるほど、われわれの人生は無常そのものであ

ります。特に現代社会のように、文化が発達し、人間の存在以上に、文化が先行する時代ともなりますと、人間の生命の危険などは、この次になります。早い話が、人間の通るべき道が、車の道となり、人間は両側に押しやられ、しかも生命の危険が、常にそこにあると言った状態のごときがそれです。しかし人間は、それが文化の発達した姿だと思って、安然としている。大師のお言葉にあるように、「云何安然不驚懼」であります。

ここで私達が考えねばならぬことは、こうした現実を、いたずらに恐れおののくことを、大師は言っているのではないということでありま。そのことも確かですが、それ以上に、早くこうした現実を直視し、これに目ざめなさいということ、強く言っておられるものと思います。ただおろおろと、その現実を恐れているだけでは、一歩も前進がないわけでありま。こうしたところを、すなおに見られるようになるには、決してなまやさしいことでありま。私自身、とてもできそうにもありません。しかし、その努力だけは、してみたいと思っています。

■善導大師の生涯とその教え■

— 六 —

◇ ◇ 修行と生活態度 ◇ ◇

善導大師が、その青年時代に道綽禪師を訪ねて、

「念仏して実に生まるることを得るや否や」

と質問したのは、大師自身の量りしれない煩惱の心のすべてを赤裸々に投げだしたことであり、浄土を願ひ求める叫びの声でもありました。道を求めてもやむことをしらぬ苦悩から解放されて真実に生きるあかしとしての念仏の意義を、善導大師は道綽禪師に問い求められたのであります。

「師答えていわく、各々の蓮華を弁じ、行道すると七日にして萎まずば、すなわち往生を得ん」

『瑞応伝』には道綽禪師の答えとしてかように述べられていますが、善導大師にとってはかならずしも期待された回答ではなかったかもしれません。しかし、それはただ単に教論の説明ではなく、道綽禪師の筆舌に尽しえないその修行体験の告白であったがために、かえって、大師の心底に響きわたり無言の説得力をもったと思われます。

このとき綽師より善導大師は『観無量寿経』を授けられたといわれますが、釈尊の説き示された経巻の一々をひもときながら、とくに浄土のみ教えに傾倒して、『観

『經』に示された教えが、大師自身の機根にびったりとかない。深く感激して、七日間席を起つことなく、ひたすら『觀經』に説き示された行法に従って修行されたのであります。

のちに、法然上人がこのことについて『逆修說法』のなかで、

「善導和尚いまだ觀經を得たまわざる前に、三昧を得たまえるかと覚え候。そのゆえは道綽禪師にあうて、觀經を得たまいたるのち、この經の所得、わがさきの所見に同じといえり」

と述べておられます。上人のお言葉の通り、善導大師は若かりし頃より、すでに『觀經』に説かれている觀と行について熟達しておられたものと思われますし、そのことがやがて道綽禪師を訪ね『觀無量壽經』が授けられてから、いよいよ浄土の信仰が深まり確信がもたれることになるのであります。

かように、善導大師は道綽禪師にお会いになられてからは、ひたすら『觀經』の行者となられました。その修

行の結果、三昧を発得したのであります。欣求してやまない浄土のすがたや莊嚴をありありと眼前にみることでできた大師の感動を、私たちが推察することは、なかなかできないことですが、しかし、大師が法悦に感きわまって全身を大地に投ぜられた様相をみるにつけてもいささかなりとも慥ぶことができます。

さて、道綽禪師を訪ねられたことについて、『続高僧伝』には、

「行きて西河に至り、道綽禪師に遇い、ただ念仏弥陀の淨業を行ず」

とありますが、道綽禪師に指南をうけてから、ひたすら念仏を行ずるまでには、容易ならざる辛苦があったにちがいありません。『新修往生伝』には、

「堂に入りては合掌拝跪して一心に念仏し、力つくるにあらずれば休まず、乃至寒冷にもまた汗を流し、この相状をもって至誠をあらわす」

とされていますが、その厳しい修行の結果が、念仏の大道に行きつき、大安心の世界を体験されたあかしとして三昧を発得されたことになるのでありましょう。そのことが後々の世において、「親証三昧大徳善導阿闍梨」として、三昧発得の徳が広く伝えられるのであります。



ひとたび念仏体験によって浄土の道をきわめられ確信をもたれた善導大師は、念仏によって、すべての凡夫が救われる道を説き示されました。その大師の日常生活は、まことに厳しいものでした。

「釈迦も尚分衛したまいき、善導、なんぞ閑居して供養を索めんや」(『瑞応伝』)

仏教の教主釈尊が、乞食正命により托鉢をもって正道の生活をまもられたことを偲びますとき、善導大師には、閑居して信施を受けるのは罪惡とさえ思えたのであります。また大師を慕い教えにすがる信者たちは、多くの供養の財物をさげたにちがいありませんが、大師は

決して財物に溺れることなく、わがものとせず、人々に施したえられたといわれます。みずから粗食にたえてきわめて簡素な生活に甘んじられ、あらゆる財は、写経などの料として、すべて布教活動に用いられたようであります。

「三衣瓶鉢を人に持たしめず、洗わさしめず、始終改むることなし。

諸々の有縁を化するに、つねに自ら独行して衆とも去らず。人と行けば世事を談論し、行業を修するに妨げとなるを恐る。

一切の名利を心に記念することなく、綺語戲笑もまた之れあらず。

戒品を護持して纖毫も犯さず。曾て目を挙げて女人を視ず」

以上は『新修往生伝』にみられる善導大師の日常の生

活態度でありますが、自分の身のまわりのことはすべて自分でなし、教化伝道の旅も単身の行動であったようであります。このことは、大聖釈尊がその伝道の心得として、「一つの道を二人でゆくこと勿れ」と諭されたことを思うにつけ、善導大師に釈尊のすがたをみる思いがいたします。

また、世俗に流れ溺れることなく、持律的な厳格な態度をもって「目を挙げて女人を視ず」という生活姿勢は、まさにそこに聖僧をみるのであります。

「人間忽々として衆務を営んで、年命の日夜に去ることを覚らず。

灯の風の中に滅えなんこと期し難きがごとし。

忙々たる六道、定趣なし。

いまだ解脱して、苦海を生ずることを得ず。

いかんが安然として、驚懼せざる。

おのおの聞け、強健有力の時、

自榮自勵して、常住を求めよ」

これは有名な『往生礼讃』にも述べられている善導大

師のお言葉でありますが、大師にとっては日常生活の瞬間、刹那が浄土への道のかげがえのない大切ないのちであるという認識に立っておられます。

ゆえに、昼夜時節を問わず、行住坐臥、いつでも、どこでも、やすむことなく、自らの精進実践の行のみでなく、あらゆる人々のいのち、働きに支えられて、一切のものが浄土に廻向されるべきものであり、浄土への道の形づくるものであるというのであります。

善導大師の日常生活を眺めてみますと、生活のすがたすべてが、大慈大悲の生き方であります。真実一路の信仰者のすがたであると同時に、「願わくはもろもろの衆生と共に安楽国に往生せん」という誓願廻向のおすがたであります。廻向とは、申すまでもなく、自他一切のこないを、ことごとく永遠の理想、究極の目的にふりむけることであるといえましょう。いわば、浄仏国土のすがたであって、浄土莊嚴のために働くといった凡夫衆生の心もちであるといふことができます。大師は、いよいよその心もちを伝えるために教化の旅に出かけられます。



青い剣と深い沼

谷川 たにかわ のぶ也 のぶや

(郷土史家)

長い厳しい冬も終りを告げ、野山は一変して華やいだ景色になりました。寒風にさらされていた木々も柔かい芽をふき、緑も日増しに濃くなり、花々も敗けじと咲き競う好季を迎えたのです。

猟師の平助にとっては、腕の見せどころの時節となりました。長い冬眠から醒めた動物たちが、嬉々として野山を駆け回り始めたからです。

ただ平助にとっては、いかに生活のためとはいえ、そうした動物たちを射止めることは、しのびがたいことでありました。できることなら殺したくない。しかし、連

れ合いと二人の子供を食べさせなくてはなりません。ほかにこれといった生きる術を持たない平助にとっては、狩りは生きるための糧であったのです。

「そうだ、子連れの動物たちには手を出すまい、一匹オカミで、暴れ回るヤツだけ狙い射ちしてやろう」と、毎年この時節になるたびに自分にいい聞かせ、心を鬼にして猟に出かける平助でありました。

さて、平助親子が住む村には、昔から奇病が流行っていました。男の子に限り、その程度の差こそあれ、春先になると原因不明の熱病にかかるのでした。二、三日で



下る子供がほとんどでしたが、なかには十日あまりも高熱が続き、そのために頭がおかしくなる子供さえおりました。男の子が授った家々では、春を迎える頃になると戦々恐々とし、高熱が続くのは、今年はずちの子だ、いや、あの家の子だと、うわさし合い、重苦しい時期を過ぎねばならなかったのです。

だが一方では、熱病にかかってほしい、それも軽度のものであってほしい、という願いもありました。それはこの奇病以上に恐い事実があったからです。

村に生れた男の子は、春先までに満五歳をすぎるとこの奇病にかかり、以後五年間、毎年のように熱病に冒されておりましたが、このうち、二、三人の子供だけは熱も出ず、平生のままで、熱病旋風が荒れ狂うあいだ、日頃よりかえって元気でありました。この子供たちこそ、哀れこのうえない身であったのです。

平助が狩りの場所としていた、村の北側に続く山は、村人たちから通称鬼山と呼ばれ、大変恐れられておりました。この山に鬼が住んでいたからです。この鬼、平生は人里には現われませんでした。一年に一度だけその恐い姿を見せるのでしたそうです。村に奇病が蔓延す

る春先になると、その醜い大きな姿を現わすのでした。そして、

「元氣なガキはどこにいる、サッサと出てこい」

とわめきちらしながら村中を歩き回り、元氣な子供を見つげ出し、さらっていくのでした。

熱病にかかってほしくない、さりとて鬼にはさらわれたくない。本来ならば寒い冬から開放され、身も心も晴れやかになる好季の春が、村人たちにとっては、一年中で一番つらい時期でありました。

村人たちの試練のときが本年もやってまいりました。

一人、また一人と熱に冒されていったのです。

平助にとっても、本年は他人ごとではありませんでした。娘のサヨはともかく、末の清助が満五歳を迎えたからです。熱か鬼か、平助の心配はつのる一方でした。

この清助、ほかの子供たちが熱病にかかっていくのをよそに、いっこうにその心配を見せません。元氣そのものののです。平助の心配が当りました。今年は清助だけが熱病にかからなかったのです。鬼の的は清助に決ったようなものでした。

平助の心痛は計り知れません。むぎむぎ愛児を渡して

たまるか、との思いで、いろいろと考えぬいたので。そして、出た結論が鬼退治です。

「ワシとて獵師だ。向こうが来る前にこちらから出向いてやろう。絶対に鬼を射止めてやるぞ」

といい残し、平助は決死の覚悟で、ただ一人山へ向ったのです。村人も祈る思いで見送りました。

やがて麓に着きました。しかし、足がそれ以上進まないのです。日頃の狩りとはわけが違うからです。

「だが、清助の命にはかえられんぞ。さあ、行くんだ」己れにいい聞かせつつ、銃をかまえ、重い足を一歩、

また一歩、慎重に山深く進む平助でありました。

ガサガサ。小さな音一つでも気になります。その音のするほうに、とっさに銃を向ける平助。日頃の癖が出るのでした。

「なんだ、ウサギか。びっくりさせるなよ、今日はお前たちが相手じゃない、鬼さまだ。どこにいるか教えてくれよ。人さらい鬼のいるところじゃよ」

そんなやりとりを、本来の相手の動物たちと二度三度かわすうち、平助にも少しは余裕が出てきました。そして、鬼を探し求め進むうち、いつしか一度も踏み入った

ことのない深山に至りました。

だんだん心細くなっていくのが自分でも分りました。

「戻ろうか、いや、そうはいかん。やり遂げねばならんのじゃ。出て来い、憎き鬼」

元気づけようと、大声で叫んだ、そのときです。

「ワッシを呼んだのは下奴だ」

耳を裂かんばかりの怒声とともに大きな地響きが聞えてきたから、さあ、大変。決心もどこへやら、平助は、銃を構える余裕すらなく、投げ出すがはいか、一目散に逃げ出してしまったのです。

眠気を覚まされた鬼といえ、怒り心頭。逃げていく平助を見るや、大股で追いかけて出したのです。

逃げ通せるはずはありません。息せき切りながら駆け平助の足は、次第に遅くなり、もつれがちとなっていたのです。地響きが、わが身のすぐうしろまで迫ってきました。諦めの思いで振りかえった平助は、そのとき足に強い衝撃を受けました。切り株につまずいたのです。

一瞬、気を失なった平助。菖蒲の群生地倒れ込んでいたのです。もういけません。鬼は、眼前に仁王立

ち。今にも襲ってきそうではありませんか。

覚悟を決めた平助。目を閉じ静かに念仏を称え始めました。いつときが流れました。

だが、鬼はいっこうに襲ってこないのです。目をあけた平助は、そこに不思議な光景を見たのです。鬼は、菖蒲の繁るところから一步も入らず、その周りを回り続けているだけで、やがて、ブツブツいいながら、その場から立ち去ってしまったのです。

キツネにつままれたような平助。わけも分らぬまま、痛い足をかばいながら、また駆け出したのです。

しばらく過ぎました。平助が山から、もう少しでぬけ出るところまで来たときです。再び鬼に見つかってしまったのです。逃げようとしても、もう体が動きません。平助は、またもや切り株につまずき、再び失神の身となっていました。

今度こそだめだ、もう助からない、決め込んだ平助。恐る恐る目をあけると、鬼は、前回同様に平助の周りを回るだけなのです。平助が倒れ込んだところには、蓬が群生しておりました。やがて鬼は、その場から立ち去っていきましました。

再び駆け出した平助。両足に受けた痛みをこらえながら、わが家目指して一目散。もう一步のところで、再び追いかけて来た鬼につかまりそうになりました。這いずる平助が、やっとの思いで入口に手をかけたときです。鬼は、大きな手を伸ばし、平助をつかもうとしたのですが、一瞬、手を引きました。

平助の腰には、二度にわたって倒れたときについたのでしょう、菖蒲と蓬の葉がついていました。これを見た鬼は、奇声を発しながら逃げ去ってしまいました。

この様子を一部始終見ていた村人たちは、

「やった、やった、平助が鬼を追っばらった、たいした人だ、よかった、よかった」

といいながら、平助をとりかこみました。

息も絶え絶え、ブルブル振えるだけの平助。村人たちは尋ねるままに、鬼との出会い、逃げながらころび、菖蒲と蓬の群生地に倒れたとき、鬼が手出しをしなかったことなど、思い出すままに話しました。

「なんだ、平助が鬼をやっつけたんじゃない、平助は憶病者よ、また鬼がやって来るぞ」

と、村人たちは騒ぎ出しました。

そのときです。村一番の知恵者として、また長老として尊敬されていた順次が、論すようにいいました。

「いや違う。平助ドンは、大変よい知識を与えてくれたよ。よく聞きなされ。鬼は菖蒲と蓬を見て逃げ出したわけじゃ。鬼には、菖蒲が剣の山に見えたのじゃ。そして蓬は、底深い沼に見えたのじゃ。だから鬼は、平助ドンには、指一本出すことができなかったのじゃ。皆の衆、そうは思わんかい」

半信半疑の村人の一人が尋ねました。

「そんじゃ、どうすればよいのかのう」

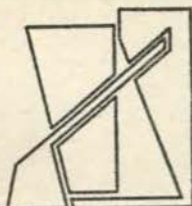
「よいか、春になったら菖蒲と蓬を摘んできて、すべての家の軒先に指しておくんじゃ。鬼は絶対に来やせん」

こうして、身をもって清助を守った平助の行状が発端となつて始まった、菖蒲と蓬の飾りつけ。以来、鬼は現われず、村には、再び平穏な生活がもどりました。

この風習は、近隣に伝えられ、やがて男の子の無事な成長を願う人々の心に通じ、端午の節句に飾られるようになったということです。

法然上人の弟子たち ⑨

津戸三郎為守のこと [五]



梶村昇 かじむら のぼる

(亜細亜大学教授)

法然上人から為守に宛てた「九月二十八日付」の消息は、先の「釈迦にも出世の本懐也」のあとに一行あり、続けて、次の文章で終っている。

又要文の事、書きまいらせ候へし。又くまかやの入道の文は、これへとりよせ候て、なをすへき事の候へは、そのうちかきてまいらせ候へし。なに事も御文に申しつくすへくも候はす、のちの便宜に又々申候へし。

九月二十八日

これを見ると、為守は上人に浄土の教えの要文をお願いしたようである。それに対し上人が「要文は書いてさしあげましょう」と言われたのであろう。ところでわからないのは、その次の文章である。「熊谷入道の文は、私のもとへ取り寄せて、直すべき事があるので、その後で書いてさしあげましょう」というのであるが、上人が、自分で書かれて熊谷に渡したものであるならば、取り寄

せて直すということはないはずであるから、この「熊谷の入道の文」とは、熊谷自身が書いたものをさしているのであらう。そうすると熊谷は、浄土の教えを自分なりに書いて、津戸らに渡していたと考えられる。為守は上人にその旨を報告し、熊谷の書いたもので良いのかどうかを尋ね、もしそれがあまりかんばしくないならば、上人の書かれた要文を欲しいとでも言ったのであらう。こう考えると上人の手紙の意味が通じてくる。もしこの推察通りであるならば、熊谷という人物は実に楽しい人物であると思われる。熊谷の入信は為守のそれに先き立つことわずか二年である。しかも、彼自身、それほど深い仏教的素養があったとも思われない。それにもかかわらず、堂々と浄土の要文を書いて為守に配るところなど、まったく愉快というほかない。先にも書いた通り、熊谷は、入信後二年、すなわち為守が上人のもとに入室した建久六年（一一九五）に、京都から鎌倉へ帰り、將軍頼朝の前で、厭離穢土、欣求浄土の旨趣並びに兵法用意、干戈故実を談じている（『吾妻鏡』十四）。このことを思いあわせると、浄土の要文を書いて為守に渡すことくらい平気でやってのけたことと思われる。

さて、以上で「九月二十八日付」の手紙は終るわけであるが、これが何年の九月であるかは依然としてわからない。ただ感じからすれば、前便の為守入信の建久六年九月十八日付から一、二年後のような気がする。それというのも、前にも述べたように、為守は、上人から阿弥陀三尊像の開眼をしていただき、つづいて、戒、袈裟、法名、念珠、真影を頂戴し、今度は浄土教の要文をお願いしているわけであるから、これらは一連のものと考えられないか、と思ったからである。そうであれば、これからあまり日が経っていないで、しかも武蔵一国に専修念仏者三十余人がでてくる時間的余裕をみて、まず二年後ぐらいであらうと思われる。この消息の前文に、『四十八巻伝』が、

この御返事（九月十八日付）を給てのちはいよいよ念仏の外他事なかりけるを見うらやみて、専修念仏の行人、かの国中に三十余人までになりければ、此よしを上人へ申しけるに、上人御返事云

とあるが、これからみても、前便九月十八日付からそう何年も後のこととは思われない。『九巻伝』には、「又後年に」とあって、語感からいえば、少くとも数年後と考

えたいところであるが、次に述べる「四月二十六日付」の上人からの消息は、建久九年（一一九八）とほぼ推定されているから、この「九月二十八日付」消息は、それ以前と思う。なぜかといえは、冒頭の「おほつかなくおもひまいらせつる程に」という一節は、為守からの消息が暫く上人に伝わっていなかったことを示すものであつて、建久九年になれば、すでに手紙の往復があつたわけであるから、それ以前のことと思うわけである。以上のようなことから、私は仮にこれを建久八年九月二十八日の消息と考えたいと思う。まことに「おほつかなき」とではあるが。

法然上人は、その翌年建久九年に大病をされている。純情な為守は驚いて使いをつかわした。この間の事情は、次の「四月二十六日付」の上人から為守宛消息でよくわかる。

まづきこしめすまゝに、いそきおほせられて候御心
さし申つくしがたく候。（引用文は元亨版）

と書きだされている。為守は上人が病床にあると聞いて、急使をたててお見舞申し上げた。それに対し「御心ざし申しつくしがたき候」と上人がいわれたのである。

このあと上人は今度の病気の経過を書いている。正月から別時念仏を五十日申していたところ、昨年来の風邪がいよいよ重くなつてしまった。二月十日ごろよりすこし口が渴くように思われたが、二月二十日が五十日になるので、それまでは続けようと思つて念仏していたが、病気がひどくなつて水など飲むことになり、体が痛くなつてきた。それで今日（四月二十六日）まで回復していない始末である。長びいてはいるが、ただ今どうなるというように思われない。医者が大事にせよといわれるから、灸や唐の薬など使っている。そのために少しばかり良くなつたようであると述べ、つづいて、

左右なくのぼるべきなど仰られて候こそ、世にあはれに候へ。さ程とをく候程には、たとひいかなる事にても、のぼりなんとする御事はいかでか候べき。いづくにても念仏して、たがひに往生し候ひなんこそ、めでたくながきはかり事にては候はめ。何事も御文にはつくしがたく候。又々申候べし

四月二十六日

と結んでいる。為守は、上人が病氣と聞いて急使を走らせ、自分も早速京都に参上するとも言つたのであろ

う。それに対し、上人が「本当にありがたいことだが、相当遠いものだから、たといどんなことがあったとしても、上洛することなど何で必要があるうか」ととめられているのである。

この手紙は、望月信亨博士もすでに指摘されておられるように『浄土教之研究』、醍醐本の『三昧発得記』の記録と照応する。それによると、上人は建久九年（一九八）の春から夏へかけて病氣にかかられ、「二月二十八日依^レ病念^レ仏退^レ之。一万二万」とあることによって、当時病が重くなったことがわかり、「八月一日如^レ本七万返始^レ之」にあることによって、七月下旬にはほとんど回復されたことがわかる。この『三昧発得記』の記録と、この消息の病状とがまったく吻合するので、この消息は建久九年四月二十六日、上人が病床にあって認められたものと推定されているが、その通りだと思ふ。この年の四月八日には、上人は、二箇条の「没後遺誠文」を認められている。それは『漢語灯録』第十巻に収められているが、それから察しても、上人の病いは非常に重く、恐らく上人自身も往生を覚悟されたものであらうと思われる。為守が急ぎ上洛すると言ったのも、この病状を伝える

聞いたからのことであらう。

関東から京都への道は容易なものではない。あの『歎異抄』の中にも、「おのおの身命をかへりみずして」とあるように、当時、この道は大きさではなく、身命をかえりみないほどの覚悟を要した道のりであったと思う。その道を、為守は「早速上洛する」といつているのである。まことに彼の純心な性格がうかがわれるところである。

ところで、この手紙は、『拾遺和語灯録』（巻中）に記されているのであるが、この手紙の末尾に、注のような形で次のようなことが書かれている。

わたくしにいはく、これは命をおしむ御療治にあらず、御身おたしくして、念仏申させ給はんがためなり。下巻の用心抄のおはりを見あはすへし

恐らく『拾遺和語灯録』の編者がつけ加えたものであらう。文中の「下巻の用心抄」というのは、『拾遺和語灯録』の「巻下」にある『往生浄土用心』のことを指しているのである。

この注のような一文は、法然上人が病氣をして、医者にかかったり、薬を飲んだりしたことに對する弁解をし

ているわけだが、全くつまらないことを書いたものだと思う。法然上人の教えは、往生浄土であるから、病氣になったら養生などしないで、早く死んで浄土へ往って生まれた方がよいのではないか、というような理屈に対する弁解である。こういう理屈を屁理屈というのであって、信仰を理屈で片づけようとする輩のすることである。大体こういう人たちは、自分は少しも信仰の中へ入っていないとはせず、その周囲をぐるぐる回りながら、理屈に合わないものがあると、すぐそれを咎めだしてしようとする人たちである。こういう人々は、この世の中はがっかりと論理的に構築されているとも思っているのだらうか。微妙な心の動きなどというものは、論理などの歯の立つものではない。信仰の世界とは、そういうもののなのである。しかし、そういう人が多いのであろう。指摘された「下巻の用心抄」も同じことで、上人はそれに対し、

御身おだしくて念仏申さんとおぼしめして、御療治候へし、いのちおしむは往生のさばりにて候。やまひばかりをば、療治はゆるされ候なんとおぼえ候。

と記している。いのちを惜しむ、惜しまぬということ

はないのである。上人がかつて禪勝房に言った詞の中に、

いけらば念仏の功つもり、しなれば浄土へまいなん。とてもかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなきと思ねれば死生ともにわづらひなし

というのがある。病氣なら病氣を大切に、直るなら直る、直らないなら直らない、「とてもかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなき」という心境こそ上人の極意なのであって、それを理屈で、病氣なら早く死んで浄土へ往った方がよいのではないか、などと言うことは、逆に「往生浄土」という言葉に執着していることで、念仏が何であるか何もわかってはいないのである。

話がとんでもない横道にそれてしまったが、それはともかくとして、この建久九年（一一九八）四月二十六日付の上人から為守宛の消息は、このような編者の注がうとましく思われるほどの師弟の心のあたたく通いあった消息であると思われる。

（つづく）

浄土句集

一田牛畝選

東京 栗原やえ子
初雪の頬をなぶりて消えにけり

東京 真野よし子
初機はたの秩父の里の白き絹

お彼岸の香煙こも籠る知恩院

福岡 原 敬二郎

百万遍く繰る伏鉦ふせがねや春灯

福岡 服部 光代

福岡 高良 慈風
開山の墓の裏藪やぶ笛子鳴く

評 知恩院は浄土宗の総本山で一年中参拝者が多く、彼岸ともなれば円山の桜も綻びかけて賑やかで、おん祖師に額ぬかき、今年七回忌の母へ焼香された煙に包まれて居られる相ふたは有難たい。

評 亡者を取り巻いて伏鉦に合せ念仏を称へつつ百万遍の数珠を繰り弥陀の来迎を願っているのであろう。近親や縁者に守られ春灯の下で天寿仏ならん。

福岡 上滝津弥音
彼岸入り仏壇掃除位牌拭く

愛知 渡辺 杜水

福岡 荒牧 還愚

埼玉 佐久間愛子
春愁や葉吞む日を重ねつつ

春の風邪軽くあなどり声に來し

評 京の宿の豆炬燵とはなつかしい。年取れば立派なホテルより、そんな宿が落ち付いて気楽で長逗留もしたくなる

群馬 島津 か寿
春の夜や丹念に繰る園芸誌

評 春の風邪はあなどり勝ちで気にもしない人が多いが、いつの間にやら声に來てお経の声も鼻声となり、なかなかしつこくて癒えない。まことに困ったものである。

評 京の宿の豆炬燵とはなつかしい。年取れば立派なホテルより、そんな宿が落ち付いて気楽で長逗留もしたくなる

福岡 高良 幸代
京錦とは名も優し肥後椿

雪吊りを終へて一服庭師かな

東京 鳥居 千代
湯豆腐や意気投合の老二人

東京 田中 秀代

懐石の芋の転げて初笑ひ

福岡 江上 楳村

恋猫にかかわりもなく寒念仏

三重 森 静枝

水仙のほのかな部屋に通されし

東京 新井 新生

さらさらと樹々渡る春近し

東京 小笠原香祥

佗助の窓辺の庭に雨静か

京都 安藤 寛

昨年こぞの綿入れの長きをかこつ老

福岡 永江 隆説

行僧ぎやうそうづの頭を剃り合ひつ日向ぼこ

東京 細田 初枝

老僧の昔語りや椿つばき燃ゆる

東京 鈴木 葉子

厨くりやこと終りし後の春炬燵こたつ

東京 猪瀬 幸子

ねむたげな姿の鼻唄はなうた櫓うしの宿

東京 真野 竜

寒念仏布施の銅貨の重さかな

東京 吉原登起子

風花のしきりに登山電車かな

長野 原 幽遊

山門に掲示伝道善導忌

広島 香月てい子

心地よき風に堤の草摘む

福岡 植藤みきを

亡なき人の偲おもはるる日や菜種なづな梅雨

福岡 国友 星詠

空港より先づ戦跡に百合の供華

大分 丹羽 難中

詠唱の師を客僧に御忌和讃

福岡 前田 秀峰

御法座に落つく蠟ろうや春時雨

福岡 新森 耕春

袈裟あきかけて吾娘わがこも待りし初詣経

福岡 行正 明弘

土筆摘みこの先牛がとうせんぼ

福岡 堀 松月

時雨ときふりるるを口実くわいじつにして庭掃ていほうかず

福岡 釈河野ねはん

春雷はるがいきに寝つかれぬことあれこれと

更衣こみかえして巡教めぐきやうの身軽みかろろさよ 一田 牛歌

◇「浄土句集」欄へのご投句を、心からお待ちいたします。



『無量寿経』に説かれていること(六)

吉村孝

世間の人民にして、父子、兄弟、夫婦、家室、中・外の親屬たるもの、当に相敬愛して、相憎嫉することなく、有無相通じて、貪憎を得ること無く、言・色・つねに和らげて、相違戾することなかるべし(世間の人で父子、兄弟、夫婦、家庭にある人、父方の親類・母の親類、つまり、あらゆる人々のことで、それがお互いに敬い愛して憎みねたむことなく、有るものと無いものとを互いに融通して満足し、貪ること無く、言葉や顔貌を常に和らげて、相手の意志に逆らうようなことをしてはならない)。

前回は涅槃(悟り)の三つの要因の一つである貪欲に就いて説かれてありましたが、ここではその中の瞋恚(怒り)に就いて説いてあります。上の文は、これを守れば怒りが起こらないという事が教えられています。

或る時、心に諍いて、悲怒する所あれば、今世の恨意は、徴しく相憎嫉するも、後世に転た劇しくして、大怨となるに至らん(しかるにある時には心に争いが起て腹が立ち怒りが外に現われれば、今はその恨みが極く少しであつても、その子から孫と伝わつて行くうちに段々と劇しくなつて大きな怨みとなるものである)。

所以は何かに(その理由はこうである)。

世間の事、たがいに相患害するとき、即時に、応に急に相破るべからずと雖も、然れども、毒を含み怒りを蓄え、憤りを精神に結び、自然に刻識して、相離るることを得ず(世の中の種々の事が互いに相手を悩ましたり危害を加えたりする時、直ちにこのような事から交わりを破つてはならないといつても、人が互いに心に毒を含み怒りを蓄えて憤りの

心を以てしっかりと把^{つか}まれて決して和^きやかになることはできない。）。

皆^{みな}当^{あた}に對^{たい}生^{しょう}して、たがい相報復^{さうぼう}すべし（このように争っている者は死後には二人が同一の世界に相對して生まれ、こゝでも復た争う事になる）。

人、世間の愛欲の中に在りて、独り生れ、独り死し、独り去り、独り来る（人は皆世間の愛欲の中に唯だ一人で生れ、一人で死に、一人で去り行き、又一人で来る、誰も仲間とではなく自分一人だけである）。

行^いないに當^{あた}りて、苦樂の地に至り趣^{おもむ}く（自分が過去に行なつた善惡の報いを受ける時には善い行ないには善い報いを得て樂な所へ至り、又悪い行ないには惡の報いを得て苦の地に趣くのである）。

これは積尊が根本の教えとして無量義經に因縁の法が説いてあるものと同義のものでありますので、その經文を書いて見ましよう。

法の相^{さう}是^ぜの如^{ごと}くして是^ぜの如^{ごと}き法を生ず（すべてのものは縁によつて生ずるものであるということです）。

法の相^{さう}是^ぜの如^{ごと}くして是^ぜの如^{ごと}き法を住^すず（縁によつて生じたものは暫^{しば}くはそのままで留^{とど}まっているということです）。

法の相^{さう}是^ぜの如^{ごと}くして是^ぜの如^{ごと}き法を異^{こと}す（暫^{しば}くそのままになつていたものが復^{また}た縁によつてその相^{さう}を変えて行くということです）。

法の相^{さう}是^ぜの如^{ごと}くして是^ぜの如^{ごと}き法を滅^{めつ}す（相を変えたものが縁によつて相を変えてゐる中に、そのものは結局は滅してしまふということです）。

この四つが因縁の真理で、善と惡とが生ずる本が説かれてゐる仏教の根本である最も大切な事であります。

法の相^{さう}是^ぜの如^{ごと}くして能^よく惡法生^おず（もの^{もの}の相^{さう}はこ^このようなものであるから、若しも惡の因に縁があつて結ばれば、そこには惡いものしか生じないということです）。文中の能^よの字は徹底的^{てつてき}のということです。

法の相^{さう}是^ぜの如^{ごと}くして能^よく善法を生ず（もの^{もの}の相^{さう}はこ^このよう縁によつて生に始まり、住・異・滅と變化するものであるから、若しも善の因に縁があつて結ばれば徹底的な善いものが生てくるということで、積尊の説く善いものとは念仏修行による大利益、即ち大功徳が得られる事は申すまでもありません）。

この真理の因縁から生じた善の報いと惡の報いが上の「行^いないに當^{あた}りて苦樂の地に至り趣^{おもむ}く」の因がこの生・

住・異・滅にあると説かれております。

身自ら之れを当け、代る者有ること無し（どんな苦痛であつても自分が受けなければならぬものであつて、代つて受けてくれる者はどこにもいない）。

善惡變化して、殃福、処を異にするも、宿予め、敵かに待てば、当に独り趣入すべし（善惡が變化してその報いを受ける所の禍と福は、受ける処が違つていてもその報いは前以て身を正しく待てば、自ら善惡の報の中に入つてゆくものである）。

遠く他所に到りぬれば、よく見る者なし（善惡の報の別に従つて趣く境界が異なるならば、愛し合つた者同志であつても再び見ることはできない）。

善惡自然にして、行ないを追つて生ずる所なればなり（善と惡は自らその行ないを追つて報を生ずるものであるからである）。

窈窕冥冥として、別離すること久長なり（他所に行けばそこは遠く暗い所で、別れてしまえば永く久しい間合うことはできない）。

道路同じからざれば、会い見ること期なく、甚だ難く甚だ難ければ、復た相い値うことを得んや（善惡を行なつ

た人の行く道は同じでないので会う時がなく会う為に努力しても甚だ難かしく復た会うことができるであらうか、決して会うことはできない）。

なんぞ、衆事を棄て、各強健の時に曼んで、努力して善を勤修し、精進して度世を願わざる（何故に無益の雑事を捨てて元氣である中に努力し善を修行して心から力を尽して仏の境界へ到達することを願わないのであらうか）。

極長生を得べきなり（今こそ無量寿の悟りを得べき時である）。

如何そ道を求めざる（どうして仏道を求めようとしないのか）。

いづくんぞ、待つべき所ある（どこに迷つて決められない所があるのか）。

何の楽しみをか欲わんや（若し仏道修行を悟りの楽しみを求めようとしないならば一体何を欲しているのであらうか）。

ここまで瞋恚（怒り）に就いての教で次が愚痴であります。

是の如きの世人、善を作して善を得、道を為して道を得ることを信ぜず（瞋恚へ怒り／＼から離れることができないような世間の人は善い行ないをして善い功德が得られ、又真実

の道へ仏の教を行なうこと、〽を行なつて眞の仏道が得られることを信しない。

人、死して更に生れ、恵施して福を得ることを信ぜず（人は死んで生れ替り、仏の智慧を知らない人に教えてその報いとして福徳を得られることを信じようとしない）。

善惡の事、都て之を信ぜずして、これを然らずと謂い、終に是とすること有ること無し（善行には善の報いがあり、惡行には惡の報いがある事をすべて信しないで、そんな事はないと思ひ、ついに善惡の教を正しいと認めることとはない）。

但此によるが故に、且つ自ら之を見となす（但しこのよ
うな間違つた解釈をしている為に、それを又正しい見方であると思ひ込んでいる）。

たがいに相瞻視すること、先後も同じく然なり（お互いに因果の道理を信じなかつた先祖に見習っていることは、先祖も子孫も同様である）。

転た相承受するに、父の余せし教令をもつてす（とどめなく受け継がれてゆくのに、先祖の残した教えだけを守っている）。

先人・祖父、素より善を為さず、道德を識らざれば、

身愚かに神聞く、心塞がり意閉じて、死生の趣・善惡の道、自ら見るに能はず、語る者有ること無し（祖先は本質から善を行なつてはいない、道德を知らないで、その子孫たる者はその身の行ないは愚かに心は知恵が足りなく、その心は妨げられて總てのものが変化する原理や善惡の道とは何であるかということすら知らず、それらの間違つていることを語り聞かせてくれる人は一人もいない）。

吉凶禍福、競いて各之作せども、一も怪しむものなし（このようなわけで善い事悪い事、不幸や幸福と思われることを銘々が行なつていても誰一人としてこれが間違つていてと気付く者がいない）。

生死の常道は、転た相嗣ぎて立つ（生ある者は必ず死すという不変の道理は、子が父の後を継ぎ子孫がまたその後を受け継ぐ如くとどめなく続いている）。

或は父、子を哭き、或は子、父を哭き、兄弟夫婦、たがいに相哭泣す（或る時父は子を失いて泣き、又或る時は子が父を失いて泣き、家族がたがいに泣くことになる）。

顛倒上下することは、無常の根本なり（逆縁・順縁が入り交ること無常の本になるものであるということ。逆縁は仏に敵し仏法を謗ることが返つて仏道に入る因縁となることで、

順縁は善事が仏道に入る因縁となる事で、無常は一切のものは生じたり、なくなったり、変つたりして決して定まてはいないということです。

みなまるに過ぎ去るべく、常に保つべからず（順倒上下する）

ことによつて、総てのものは変化を重ねて最後には皆消滅するものであるからその状態を永く留めておくことはできないものであるということです。

（つづく）

◆年会費値上げのお願い◆

◎新年会費 二、五〇〇円

〔昭和五十四年四月より実施〕
『浄土』四十五巻・四月号以降

諸物価の高騰と諸般の事情により、しばらく頑張つてまいりました当法然上人鑽仰会の会費を、従来の一年分二、〇〇〇円から、表掲の一年分二、五〇〇円の年会費に値上げさせていただきます。新会費を実施するのは、一応本年昭和五十四年の四月（『浄土』四十五巻、四月号）以降からいたします。諸種の便宜をはかり、充分に意を尽してことに當るつもりです。どうぞ会員の皆様のご暖かいご配慮とご援助をくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三國志 (空)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



藤原定家が「明月記」の建保二年（一二二二）七月十八日の条で、左中将伊時朝臣の妻が出家し尼となる、これは近代念仏宗の法師たちの所業であるか、天下の姪女、競いて屋形を仮り、狂僧に属従す、と酷評している。風俗壊乱を嘆くのである。

近代念仏宗とは、法然を盟主と仰いだ専修念仏の徒を指していることはほぼ間違いない。

ところで尼になった左中将伊時の妻を「前内大臣ノ落

胤ト云々」と定家は憶測する。前大臣とは九条兼実の次男良経であって、この建保二年を去る七年前に世を去っている。しかも定家と良経との関係は「新古今集」同人という歌人仲間だけでも幾重もの太い綱で結ばれた仲であった。

良経の落胤を「天下の姪女」と呼ぶあたり定家の悪意は露骨である。

藤原定家——

父は歌道で名を馳せた俊成である。崇徳帝在位の久安年間から彼の歌業は世にあらわれ（久安百首）、命終の元久元年の春日社歌合せにおける作品に至るまで、じつに五

十数年間に千五百首をこえる歌を詠みこんだ。自身による作歌だけでなく、歌合せ席上における判詞（審査員）としても絶対の權威を以て君臨したものである。

当時この国における文化の中樞は歌道であったから、藤原俊成の地位は今日の文化庁長官に比せられる。

ただし、今日でもそうであるが、官僚体系のなかにあって文化庁長官の地位は低い。

俊成は、御堂関白道長の六男権大納言長家を祖とする家に生まれた。れっきとした藤原一族である。「御子左家」（みこひだりけ）と呼ばれた。醍醐帝紀の左大臣源兼明の邸宅を買って住んだからで、兼明は皇子だった。父の俊忠は権中納言、とそれまで宮廷の頭官だった「御子左家」が俊成の代へきて、ばったりと昇官の道が閉ざされてしまう。俊成自身の最高位は、五十三歳になってやっと擲んだ従三位非参議であった。非参議は文字どおり名譽職で、宮廷政治の枢機には加われぬ閑官である。

御堂関白道長の長子から出た宗家とは言いながら九条家の華やかさとは比ぶべくもない。いわゆる貧乏公卿の鬱憤を歌道に託し、權威らしきものをひけらかしたのが、父俊成の九十年に及ぶ生涯であった。

前号のあらすじ

將軍実朝の側室として鎌倉へ下る坊門の姫君を京都へ迎えるに來た使節の代表北条政範が、着京早々に客死したのは十六歳の時であったという。北条時政の息子たるこの若者の葬儀は、北条武士団の中でも専修念仏の篤い信者であった結城朝光が一切をはからい、安樂房邊西が取り行なった。しかしこの死をめぐるでも、鎌倉武士団の分裂を策謀する後鳥羽院の魔手がのびていた。そして実際にも、元久二年（一二〇五）七月、後鳥羽院の好遇を受けていた平賀朝雅の謀反という現実へと進んで行く。それは実朝暗殺への暗躍を含めた、京都、鎌倉の抗争であった。しかも後鳥羽院やその側近の専修念仏教団への強い憎悪と反発があり、民衆の間に次第に拡まって行く念仏信仰とは別に、政治的世界での複雑な動きが法然教団の世界とも絡み合っていた。

その權威らしきもの。俊成は他人の作歌を批評するにあたりいつも「幽玄」という言葉を常用したらしい。「深味に欠ける」「玄妙さに乏しい」と酷評して、新進歌人のシャープな美意識を蹂躪した。俊成の峻厳な美学をクソ真面目に受容した鴨長明なぞは、

一詞ニ多クノ理ヲ籠メ、アラワサズシテ深キ心ザシヲ尽ス。見ヌ世ノ事ヲ面影ニ浮ベ、イヤシキヲ

借リテ優ヲ現シ、愚カナルヨウニシテ妙ナル理ヲ
極ムレバコソ、心モ及バズ詞モ足ラス時、是ニテ
思イヲ述ベ僅カ三十一字ガ中ニ天地ヲ動カス徳ヲ
具シ、鬼神ヲナゴムル術ニテハ侍レ

と難解千萬な歌論を組み立ててしまふ。『論』に縛ら
れて鴨長明自身は容易に歌が詠めなくなる。

定家は、父俊成の秘密を腹の裏側まで見透しているつ
もりであつた。

俊成自身の作品に、そんな幽玄さなぞ、さらさらなか
つた。

新進歌人として定家が宮廷で名をなしはじめたころ、
彼は父俊成を鋭く批判したことがある。

夕されば野べの秋風身にしみて

鶉鳴くなり深草の里

若き俊成の代表的な作品である。

定家の批判はこの歌の情緒環境が「伊勢物語」にある
点を指摘して衝いた。「伊勢物語」の百二十段に、

昔男ありけり。深草に住みける女をようようあき
がたにや思ひけむ。かかる歌を詠みけり。
年を経て住みこし里を出でていなば

いとど深草野とやなりなむ

女返し

野とならば鶉となりて鳴きおらむ

狩にだにやは君は来ざらむ

こんなくだりがある。俊成の「深草の鶉」はその情緒
の追体験にすぎぬ、と若い語気でえぐつた。盗作だとさ
え、なじつた。

父はとぼけた。

「伊勢に、そんな箇所があつたかのう」

「当時の父上がご存じないわけはありませんまい」

「いや、知らなんだ。かりにあつたとしてもだ。あの作
品で伊勢物語の声価は一段と高まるであらう。芸の道は
くり返し積み重さねられるところに広がりも出来るし、
深味も出てくる」

「……………」

「そもそも歌道の境地なぞ、殆んどどこかにお手本があるものよ。そのお手本を、見事になぞって權威づけた者だけがこの道の大成者となる」

「俊恵法師は父上を諷して、伊勢見ざる歌よみは遺恨の事なり、と言ったそうではありませぬか」

俊恵法師は鴨長明に和歌の手引きをした。賀茂神社の末社河合社（ただしや）の神官の次男にすぎなかった長明を、宮中和歌所の寄人にまでみちびいた師匠である。

「俊恵法師ばらが何を申そうと、深草の鶉は法皇お氣に入りの詠唱でとう」

俊成はぬけぬけと言つてのけたのである。宮廷の権力者に氣に入られれば「創作の純度」なぞどうでもかまわぬ、というわけだ。

この言葉だけだったら、若い定家は決然と父と袂を分かつていたかも知れない。俊成は釘を刺すように、
「わしら如き微禄の家は、歌でも詠んで……」

宮廷で存在を誇示していない、とたちまち取り潰されてしまふ、とわが子をたしなめたことであつた。

事実、盗作もどきの「深草の鶉」は御子左家を救つて
いる。

俊成は歌を通じて崇徳帝に愛された。やがて發生した保元の乱で、直接に加担はしなかったが、そんな能力もないわけだが、心情的には崇徳上皇方だった。戦後、俊成が宮廷で生き残れたのは、後白河上皇が「深草の鶉」を愛唱していたというその一事のためだけであつた。

後白河院は歌意に惚れこんだわけではなく、今様ぶりで朗唱するうえで「夕されば野べの秋風身にしてみて……」の語呂が氣に入っていたようである。

わしら如き微禄の家は……定家は年齢を数え増すたびに、その実感を深くしていった。

二一

藤原俊成が九十をこえる長寿を閉じたのは、元久元年（一二〇四）十一月三十日である。

その月二十六日、定家は父の病篤しの報を得て、ひどい喘息の発作をおして御子左家の旧邸へ向つた。俊成はこの数日前、九十の賀を和歌所で表彰されたばかりだった。

駆けつけてみると、父は高熱を発しており、右側の頬

＜東山に降る初雪＞



が腫れあがっていた。昨夜から何も食さぬという。しかしわが子定家の顔をみると、

「法性寺へゆく。あそこで死にたい」

きっぱりと言った。かねて心に定めていた臨終の場所だったのであろう。

九十の老体、しかも危篤状態だ。定家はそんな移動は無茶だ、と父を説得する。

すでに言葉は綴れない。しかし、父俊成の眼は言葉以上のものを語っている。定家には理解出来るのである。

一代の歌人藤原俊成が死ぬ。凡庸な死にさまであつてはならない。後世の語り草になるような……それがお前自身をも利する。

病軀の俊成を法性寺へ運んだ。

なぜそんな場所が選ばれたのだろうか。すでに荒れはてた廃寺であった。

だが、そこは藤原栄華の日を築いた御堂関白道長が自己の命終の場所に作った寺なのである。道長は丈六の阿弥陀仏像の前に屏風をめぐらし、その内へはいり、法衣の襟元をただしたあと坐したまま静かに眼を閉じて死んでいた。

六男とは言え、俊成も道長の直系である。父祖の寺を求める俊成は最後まで「演伎」徹した男だった。

いや、その「演伎」は息を引き取る瞬間まで続く。

二十九日、わが子の静快已講を招いて戒を受ける。「よく保つや否や」の問いかけに、はっきりと「よく保つ」と答えた。そのあと俊成は雪を求める。高熱で咽喉が渴していたのであろう。

定家は東山につもる初雪を小者に求めさせる。夜半になつて手桶一杯の雪を持ち帰られた。

俊成はがつがつとそれを喰べた。

「めでたきものかな」「なお、之も言わぬものかな」と上機嫌である。歌の話などをする。

このあと、しばらく眠って眼をさまし、

「死ぬべくおぼゆ」

と言つたので定家たちは枕辺に集つた。念仏を唱えはじめると、俊成自身も二声三声、念仏を唱え、そのままこと切れた。

見事な往生である。あらかじめ計算し、企画した「演伎」とは言え、ここまで徹し切れれば見事、と言うほかはない。

それにしても、こうまでしなければ「家が保てぬのか」と定家は空しい気分にもなった。ことに父が死ぬ前日の朝、定家は最勝金剛院へ出かけた。そこに九条兼実がいたのである。兼実は定家に命じた。

臨終ノ事、殊ニ構エテ沙汰スベシ。善知識ハ尤モソノ器量ヲ扱フベシ。是レ多生曠劫一度ノ大事ナリ。秘計ヲ廻ラスベシ。コノ事ヲ示シ訓フルタメ招請スル所ナリ（今朝召シ有リ）早々ニ構エ営ムベシ。又骨ヲ痛ム事ハ湯體ニ馬ノ食スル物ヲ入レテ、温湯ヲ入レテ、上ニ席ヲ敷キテムス。第一タスカル事ナリ。コノ事ヲ試ムベシト、仰セテ承リテ退出ス。病者ノ御許ニ参ズ

九条兼実を、定家は「明月記」で「入道殿下」と敬称し、別格に扱っている。当然である。九条家は本家であるばかりではなく、宮廷で開かれるお歌会には扶持を出し、九条邸でも月例の歌会を開いて、物心両面から俊成父子を庇護してくれている大パトロンである。

いま紹介したように、九条兼実が父俊成の臨終儀につ

いて二十九日の朝こまごまと注意を与えた事実を「明月記」は書いている。

承リテ退出シタ定家だが、何一つ実行した気配がない。馬ノ食スル物ヲ入レテはともかく「善知識ハ尤モソノ器量ヲ扱フベシ……コノ事ヲ示シ訓フルタメ招請スル所ナリ」と善知識の人選には兼実の思惑があつたようである。誰かを推挙したにちがいない。だが定家は暗黙のなかで拒否している。そして、自分とは異腹の弟静快をこれにあてた。

なぜ九条兼実は推挙したのか。

ソノ器量ヲ扱フベシ……兼実が法然門下の念仏ひじりを推挙してきたことが容易に察せられる。定家は念仏ひじりを極度に忌み恐れていた。

理由は簡単だ。後鳥羽院以下の宮廷の権力者たちが、念仏ひじりを坂東の「まわし者」として色眼鏡で見ていたからである。

父俊成の死後、三カ月ほどして歌の同志でもあり、九条兼実邸でも腹心の仲間だった右京権大夫隆信が死ぬ。

「明月記」は淡白に書く。

今日聞ク。右京権大夫入道、旧来病悩、夜前己ニ入滅スト。聞キ及バズシテ、病ヲ問ハズ。臨終ノ体殊勝。高声ニ念仏シ、清衣ヲ著ク、五色ノ糸ヲ引キ坐シナガラニ終フト云々。今夜、忠弘ヲ以テ之ヲ問ワシム

これだけの記述である。だが、用意周到な定家の姿勢がうかがえる。自らは隆信邸へは出かけず、院の北面に仕える武士忠弘に臨終の様子を見聞させ、報告させているのである。

右京権大夫隆信は、絵も巧みにし歌心もさわやかな当世一流の文化人である。定家はその人柄も好きだった。磊落で、どこにも「ぶる」ところがない。ことに女色の話をさせると、淫画なぞ書きちらしながら徹に入り細をうがった女体描写をやつてのける。

定家とは血縁はなかったが妹分にあたる建礼門院右京大夫との情事なぞ、グラマーな年増女を全裸にむいてしまったような迫真力があつた。

才人ではあつたが、ことに歌道に関しては定家のジェラシイを刺戟するような感性はなかった。安心して付き

合える男だった。

だが晩年になった隆信と、定家はあまり口をきかなくなっている。警戒していたのだ。理由は隆信が熱烈な法然義の念仏者になってしまったからである。

隆信の臨終を法然伝（四十八巻伝）は次のように書いている。

右京権大夫隆信朝臣ハ深ク上人ニ帰シ、余仏余行ヲサシオキテ、タダ弥陀ノ一尊ヲアガメ、ヒトエニ念仏ノ一行ヲツトム。ツイニ上人ニ從イテ建仁元年ニ出家ヲ遂ゲ法名ヲ戒心ト号ス。一向念仏ノホカ他事ナカリケリ。生年六十四ノ春所勞危急ニ及ブ。上人聞キ給イテ住蓮安樂二人ノ門弟ヲツカワシテ知識トセラレタリ。既ニ終リニ臨ミ二人ノ僧ヲ左右ニ置キテ病者ト知識ト同音ニ念仏シ來迎ノ讃ヲトナエ端座合掌シテ往生ヲ遂グ。元久元年二月二十二日ナリ。紫雲音楽以下ノ奇瑞一ニ非ズ。後ニ正信房、カノ墓所ニ向テ念仏シ給ウニ異香失セズ。日本往生仏ニ記シ入ラレケルトナン

隆信は、その子信実が描いた法然上人御影が現存するほどの念仏信者だった。この臨終が誇張であるとは思えなかった。

三

「そのように見事なご往生であったか」

定家は北面ノ武士忠弘の報告を静かな表情で聞いた。

「兩名の念仏ひじりたちのと見える礼讃もなかなか美音だったそうで……」

忠弘は探ぐるような視線を向ける。

定家には判っている。いや、忠弘の本音を知っていればこそ、今朝隆信邸へおもむかしめたのである。

この北面ノ武士は後鳥羽院の内意を受けているにきまっている。その内意とは……定家が法然を盟主とする専修念仏者の一味であるかどうかの確認である。

「いや、あの法師ばらはな、女を美声でたぶらかし、淫慾へ引きずりこむことだけがねらいなのじゃ」

「しか当今、念仏信者は都にみちみちております」
忠弘は話題を誘導してゆく。

「愚かな者ばかりよ。あんな説法に言いくるめられるとは」

沢山、悪口を並べたてよう。それは、後鳥羽院の耳へ筒抜けになるのだ。

「入道殿下も篤信な専修と申すではありませぬか」

天台念仏と区別するために、宮廷では法然門下を「専修」と呼び慣らしていた。

おいでなすったな、と定家は胸でほくそ笑んだ。

九条兼実を主家とする定家である。院では定家がすべて兼実に右へならえする男だと信じこんでいる。

「旧冬もわが父の臨終にあたり、入道殿下は善知識に……」

と「明月記」のくだりを、定家は忠弘に告げてわが立場を明確にした。

そればかりではない。と定家は座を立つと文箱から古い綴じ込みを持ってきた。建仁二年（一一〇二）正月二十八日の日録を忠弘に読ませるのであった。

その日に何があったのか。現存する「明月記」は綿々と書いている。

二十八日。天晴ル。入道殿渡リオワシマス。午ノ時バカリニ隆信朝臣ノ使者来タリテ云ウ。夜、前ノ九条殿御出家。幽カニ聞キ及ブカト言エリ。入道殿婦リオワシマスノ後、申始バカリニ、法性寺ノ月輪殿ニ参入ス（新御堂）。夜前御仏事ナド訖リ、予ノ時バカリニ此ノ御堂ニオワシマス。法然房参入シ、御本意ヲ遂ゲラル。奈良法印、剃リ奉リ給フト云々。三位中将殿、以前ニ参ジ給フ。僧達其ノ料ニ召シ仕ワルベシ。盛房、国基ノ子、小法師ドモ参候スト云々。此等ノコト皆以テ物ヲ急グニ似タリ。貴賤ノ妻室、四十九日ニ遁世スル事、頗ルソノ例ヲ聞カズ。去年ノ秋、此ノ事、天下謳歌スルモ実無シ。而レドモタダ世ノ嘲リヲ招ク。今度コノ如シ……

法然によって九条兼実が「専修」門に出家した事実を非難した文章である。これこそ藤原定家が後鳥羽院へ知らせる積明の記述と言えるであろう。北面ノ武士忠弘は、文意を正確に報告してくれるはずである。

「隆信朝臣の弔問にはゆかれませぬか」

忠弘は去りぎわに念を押した。

「ゆきたいのは山々だが、いずれ「専修」の徒が多勢詰めているであろう。そのような場所へ顔を出すのも不愉快だ」

「よほど定家卿は「専修」がお嫌いのようで」

忠弘は得心した顔で帰っていった。

ほっと安堵の胸を撫でおろした。

昂奮したせいか、持病の喘息が激しい発作をおこした。

目くらむ咳込みのなかで、定家は亡父俊成の面影を思いうかべている。

彼九十年の生涯も苦難に満ちたものだったではないか。保元の乱時もだったが。それ以上の危機は治承元年の鹿力谷事件であったはずだ。

俊成の娘京極殿は大納言成親の正室であった。成親は平家の御曹子重盛と義兄弟の間柄にある。その成親が後白河院に誘われて平家追討の陰謀に加担した。

口軽な後白河院が歌合せの席上で、ふと洩らした言葉尻から父の俊成は素速い行動に出た。わが娘京極殿を成親から引き離したのである。正式に離婚、その旨をすて

に平維盛と結婚していた京極殿の娘に告げにやらせている。つまり平氏一門に公表したわけだ。

この公表があったればこそ、鹿力谷の肅清で家を全うすることが出来た。

「機を見るに敏、過ぎるかな。いくら逃げ足が早くても出世は出来ぬしもう」

後年になって俊成は、自嘲したものだった。

危機を回避するには敏だが、逃げてばかりいるのでは結局出世の太い綱を掴みそこねる、というわけだ。生涯かかって従三位非参議の閑官が俊成が得た最高の官位だった。

血は争えぬ……と、ようやく咳込みがおさまって、定家はすっきりした咽喉元から発語したくなる。

おのれ自身も、つねにびくついて危険回避に全神経をとがらせている。

だが、いったいどんな官位、知行が得られたというのか。

内蔵頭の地位をねらってこの三年来、定家は奔走し続けた。宮廷の権力者卿二位兼子には馬などを贈賄した。だが、いっこうに埒はあかぬ。

知行と言へば、吉富の庄園問題で定家は悩まされ続けている。唯一つの収入源であったのを、憎いのは関東の北条時政だ。割りこんできて自己の所領だと主張する。

うっかり長楽寺の山僧で杲云などという得体の知れぬ坊主の口車に乗ったのもまずかった。比叡山衆徒の力で、かつて近江領から佐々木一族を追放したように北条なぞ蹴散らして進める、と景氣のいいことを言った。

だが北条時政には牧ノ方や阿波ノ局という後鳥羽院につながる太いパイプがあった。山師坊主の杲云が、なまじ乗り出したために定家の立場は著るしく不利になった。

北条家の野望は、吉富の庄園を突破口にして、姉の建寿御前が仕える八条院の所領にまで蚕食の手を伸ばして来つつあるのである。

危険を回避して逃げまわっているだけでは自誠を待つ以外にない。

妻がはいってきた。

「明日は卿二位さまが御逆修をおつとめになります」

「そうか」

と受け流しただけである。

卿二位兼子。あの狂女が何の逆修か。

「ご挨拶に伺わねばならぬのでしょう」

兼子の一族に端しっこでつながっている妻は、忠義立での表情を作る。

「いや、その必要はない」

「そうでしょうか」

定家が恐れるのは、卿二位邸へ出かける妻の装いである。すでに桂は古びしてしまった。妻は新調を求めている。

そんな能力がどこにあるのか。

また然るべき訪問ともなれば、網代車を用意しなければならぬ。その出費も馬鹿にはならぬ。

妻はふくれっ面をして、退がっていった。夫がきびしい表情で作歌の思索へはいったのを見て取ったからである。さすがに作歌する折だけは一切口を出さぬ習慣がついていた。

作歌なぞクソ喰らえだ、と定家はわめきたい。

近ごろは、なまじ苦吟するよりも九条邸で気易く詠みあげる連歌に、意外とさわやかなものが出来るのである。長年にわたって言葉をもてあそんできた年の功とで

〈燭台を掴む定家〉



も言うべきであらう。逆に苦吟をいく重さねても、新しいものは何一つ出てはこないのである。

俺も年老た、と定家は減入った気分になる。

すでに四十五歳。

歌道など、どうでもいい。妻を満足させ得るだけの富と、殿中で自分を納得させるだけの官位が欲しい。

昔は元氣だった、とも回想する。

あれは文治元年の冬であったか。

定家二十二歳。正五位ノ下になったばかりだった。昇殿を初めて許され、得意満面で歩きまわっていたら、若い公卿が口汚たない言葉で冷やかした。

定家はカッとなって、かたわらの燭台を掴んで公卿の頭上から殴りつけたものだ。殿中は大騒ぎになった。

たちまち定家は除籍されて蟄居しなければならなかった。

父俊成の取りなしで、二年後によりやく復権を許されたが……あの覇氣がよみがえって欲しい。もはや人生、残りは幾ばくもないではないか。どこかで勝負を賭けねばならぬ、としみじみと思うのであった。

(くぐく)

二 編集後記 二

○小椋桂が唄っている。「思い出してください。あの頃を、あきらめることを知らないで、通り過ぎる毎日が、新しいあの頃を」(『思い出してください』より)、と。——
 そういえば私も、道に迷って歩き疲れた子供の頃のことや、初恋の手紙を送った学生時代のことは、もう遠い昔のできごとのように、どこかへ置き忘れてきてしまっている。毎日の慌ただしい生活が、過ぎ去って行った過去の思い出を振り返る余裕を与えない。焦燥と不安のイライラが、心のゆとりを絶え間なく侵している。かくして、さして遠くもない昨日のことが、今日の喧噪の中でかき消えて行ってしまう。もちろん明日のスケジュールも、締切の迫ったいやいやの約束仕事だけである。確かに現実は何とも辛く、厳しい。——小椋桂の歌を聴いても、眠りを逃した夜に、慰めと安らかさはない。日毎に量を増した水割りのコップ

だけが、手許にちらつくばかりである。

○とはいえ、季節は五月に入って、青葉のすがすがしさ、その樹木の緑をそよがせるさわやかな風。街々の風情も初夏を呼ぶ装いに衣更えて、人々の声も姿も軽く快い。かつて石田波郷は、バスを待ち大路の春をうたがはずと詠んだが、街にあふれる青春の躍動はもう来るべき夏の到来を予感して疑わないのである。

乙女合掌絶えずきらに五月の日

草田男

五月来る四月はひとを想ひしが

小いとよ

○さて弊会の年会費も、先月より二五〇〇円に値上げさせていただいたのであるが、その後会員諸兄からの暖かいご配慮をいただいて、編集子というよりは、不手際が多い事務一切に忙殺されている私にとっては何よりもありがたく、この誌面を借りて心から感謝したいのである。どうか今後共、くれぐれも宜しく。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 五月号

昭和十年五月二日
 第三種郵便物認可

昭和五十四年四月二十五日 印刷
 昭和五十四年五月 一日 発行

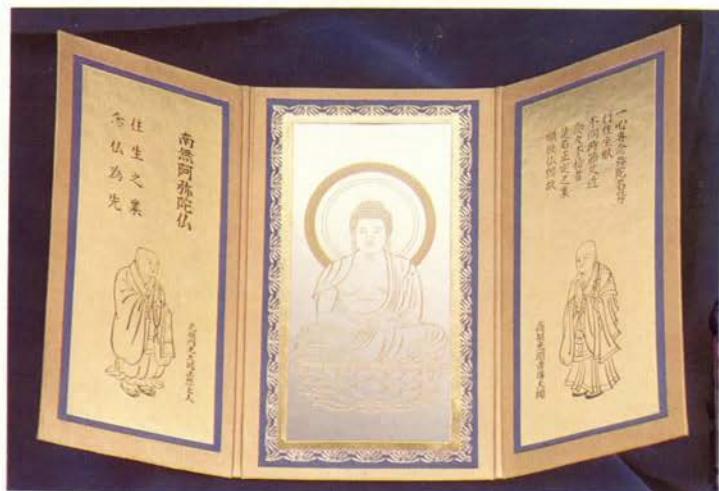
編集人 宮林 昭彦
 発行人 佐藤 密雄
 印刷人 関 二三男
 印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六
 発行所 法然上人鎌仰会

電話東京二六二局五九四四番
 振替東京八一八二一八七番
 千二〇三

ねん 念 じ 持 ぶつ 仏

=新発売=



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円 (五十体以上は一割引)

送料 一体 200 円 (五十体以上は無料)

●寸法 21.8cm × 14cm 3 枚折・実用新案登録済=番号53-044860号

(発売元) 〒153
 東京都目黒区目黒 4-16-12
 株式会社 泰 童
 TEL (03) 711-6006

(取扱い) 〒102
 東京都千代田区飯田橋 1-11-6
 法然上人鑽仰会
 振替(東京)8-82187番